伝奇ミステリー

縁切り呪い殺人

平　龍生

1

野分の寒さが一目でもわかるぐらいに、野や山は枯れていた。強く風も舞っていた。東京から車を走らせて二時間余りが経過していた。

群馬・太田市の国道沿いの道は、雪こそなかったが、寒々しい稲苅田の風景は、どこまでも続いているかに思われた。

「可津子さんの話を聞いていると背筋が何だか、ぞおーっとする。ぼくいやーな気分になって来た」

ハンドルを握っている加賀直彦が首をすくめてみせた。

久坂可津子が口にした話題に触れた。どこか、用心した口ぶりだった。

「一つのゲームだと思えばいいんじゃない。男と女の縁を切らせるって話、相手もあることだし、さて、首尾の方はどうなることでしょう。どのように話が展開して行くかわたしにも想像が付かないところがスリルもあっていいわ。“縁切り観音サマ”に願を懸けて、その成就の結果を、わたしたち

は愉しむって趣向よ。呪われた相手、誰だか知りたい？」

さらりと久坂可津子は言って退（の）けた。

「いや、それはまだちょっと…」

あやふやな答えを直彦が返した。

「ふふ」と可津子が笑って見せた。

瓜実顔の整った顔立ちだったが、やや目尻が上がっていて、見様によれば、可津子は気の強い女にも見えた。

それに、下唇が肉厚であるところは、好色そうな性向にも見え、時折り、唇を示す癖も、この女の淫らを表しているかのようでもあった。

これから、二人が向かう“菅塩観音”は、縁切り神社としては、少しは知られている。

以前に、可津子は城東大学助教授の香山和光の助手として、学術調査のために菅塩観音の社（やしろ）には同道したことがあった。

この二人が不倫の仲であるらしいという噂話だけは耳にしていたので、“悪縁切り祈願”の相手は香山なのかと、直彦は頭を巡らせた。

加賀直彦は二十三歳、可津子は彼よりは六歳上、同じ、香山教授の下で二人は助手役の任も負っていた。

情報工学を専攻している彼は民間信仰には、それほどの関心はなかった。

データなどの集積に関して、香山教授から乞われて、基礎データの作成作業を手伝ったのが機縁で、可津子とも知り合った。

その彼も、年上女に憧れる伝で、可津子の肉体的魅力にもどこか惹かれている一人だったが、まだ、二人の間には、肉体関係はない。

二年前に、直彦は母を交通事故で亡くした。

母一人、子一人の母子家庭の育ち、そのショックで立ち直れなかった時、可津子に殊（こと）の外（ほか）に優しくされた。

実際に、可津子の住むマンションの一室に招かれた時、直彦は可津子に抱かれて一つ布団で抱き合った。そうやって、一晩、直彦は泣き明かした。以後、直彦は可津子の意のままになる男としての性向を示すようなった。

つまるところ、これは、“マザー・コンプレックス”の延長線上にも身を置くような話であった。

この奇異な体験をした時は、喪中の身でもあったので、母親を抱きしめているような暖かさに包まれて一時（いっとき）を過ごしただけということで、二人はほんとうの意味での男女の仲となったのではなかった。

持ち掛けられた話も、多分に、可津子の言うことなら何でも言うことを聞く、“操り話（マインド・コントロール）”のゆえだとも言えそうだった。

民俗学者の香山がこれまで調べた結果では菅塩神社の縁切り信仰が、いつの時代から始まったのかはよくは分かっていない。

江戸時代の観音信仰の名残りだろうと言うだけで、その風習の始まった年代も定かではなかった。

男と女が背中合わせでそっぽを向いている絵馬などがお堂の中や外に掲げられていたともいう。お堂自体は大正六年の火災で焼失し、その後、お堂は再建されが、そのお堂自体も今はなく、小さな石の祠（ほこら）と数枚の絵馬がわずかに残されているだけであった。

菅塩観音の“縁切り霊験”の由来話には、いろんな言い伝えがあるが、次のような話も、まことしやかに伝わっている。

むかし、新田堰（せき）に石橋を掛けるとき、その用材として菅塩の琴平神社にあった大石（男石）を引き出したが、途中、菅塩観音を通り過ぎようとしたら、大八車の芯棒が折れた。観音さまにはもう一つ女石があり、男石と別れるのがいやで、女石が男石の芯棒を折ったと言うのがその俗説物語の由縁であったが、女石の願いも空しく男石は運び去られ、橋材にされてしまったというこれは哀話。

「いまも男石と女石は離れ離れのまんま、これ、地元の人でも知らない人が多いみたいだけど、私はちゃんとあなたをその場所に案内出来るのよ」

可津子が得意げに言った。

車は国道を逸れ、脇道に入った。農家の点在する里に入ってからしばらく走った。やがて、可津子が指示し、とある道路際に車は寄せられた。

車から降りるように直彦は促された。

養蚕（ようさん）農家の建屋のある脇の草っぱらに転がされている石臼（いしうす）のような形状の石を、それらしく可津子が指さした。

ある程度の角度を保持しながら見ると、それが女陰を型取ったものであることが直彦にも分かった。

ちゃんと、底を穿（うが）った割れ目があり、そして、上部とおぼしきあたりには、丸いかたちの膨（ふく）らみがあった。女石の謂（いわ）れなどは記されていないので、由縁を知らぬ者には、路傍に打ち捨てられた石くれぐらいにしか見えないに違いなかった。どこと言って特徴もない。

「ね、女の人の形だってこと、分かった？」

「これ、大女ってことになりますよね」

「わたしは願い事ありよ。ちょっとわたしは時間をもらうわ」

そう告げてから、可津子は裸石の小祠の前に立った。今でも参詣する人があるのか、女石には赤い布切れが巻き付けられていた。

その赤い布切れに手を触れながら、呪文のような文句を可津子は唱えた。

それらしき秘儀を了えると、可津子が一、二、説明を加えた。

「女石は今は神様の持ち物よ。次は、男石に会わせてあげるからついてらっしゃいよ。ここから、徒歩で、六、七分のところ」

車から出て、直彦は可津子の背に従った。

女石の置かれている場所とは、道を距（へだ）てた方角のとっつきの場所に墓場があった。その脇は、細道の坂になっている。

誰も踏み込まぬ領域にと足を踏み込むような気分に直彦はなった。

曇った冬空のせいもあるが、途中の道で見た半分は骨組みだけのビニー

ルハウスは、ビニール片がばたばたと風にはためいていて、異様な感じを醸（かも）し出していた。その先の地点からは急坂になった。

「この道は誰も寄り付かなくなっているけれど、元々は琴平神社への参詣道だったのよ」

先導している可津子が振り返り、直彦に告げた。

このとき、直彦は嫌な予感を覚えた。コンクリート舗装された幅一メートル余の坂だったが、道は罅（ひび）割れ、枯れた雑草が、舗装路の隙間から生え出ている。もう、何十年も人の手は入っていないかに思われた。

高処（たかみ）の空を見上げると、鈍色（にびいろ）の天があり、その向こうには死界が開けているように直彦には思えて来た。

急坂なので息が切れた。その分、体は暖まった。

目的地に着いたとき、直彦はその場に立ち竦（すく）んだ。

坂の極みに黒い森を従えた菅塩神社があった。石の鳥居の奥に本殿の社がある。あたりは草ぼうぼうで、枯草ばかりが境内を埋め尽くしていた。この廃社の境内に足を踏み入れることを直彦は躊躇（ためら）った。

古びた石製の鳥居の下には“結界”を示すための注連縄（しめなわ）が張られていた。年月の経過のせいで、注連縄だけになっており、紙の御幣（ごへい）は吹き千切れていてない。

立ち止まったままの直彦には構うことなく、一人可津子は歩を進めた。

六、七段ある鳥居の先の石段道を上って行った。

途中で、振り返り、直彦を差し招いた。
可津子の長い髪だけが翻（ひるがえ）った。
引き寄せられるように直彦は可津子の背を追った。
石段道も枯草に覆（おお）われていた。社殿の荒れようはひどいものだった。屋根瓦は剥がれ、雑草が立ち、庇（ひさし）は朽ちていた。
壁には板戸が打ち付けられている。この社（やしろ）は、里地の者でさえ、足を踏み入れぬ地のようであった。
それでも一歩二歩と進み直彦は社殿に近付いた。社殿を覗き込むと、神は祀（まつ）られてはいず、中はがらんどうで、雨風もそのままに吹き入るといった体（てい）であった。
人からも縁を切られた縁切り社（やしろ）？そんなふうの文句が直彦の頭を過（よぎ）った。何とも、おぞましい光景であった。
「男石はあちらよ。案内するわ」
身を屈（こご）めている直彦をちらと見遣りながら可津子が言った。
社殿左手隅の草むらにと直彦を連れて行く。
高さ一・五メートルほどの棒状の石塔が立っていた。男根型の陰陽石で、大きさから推測すると、先ほど確かめた女石とは一対ということになる。
男石には、枯れた蔦（つた）が何重にもなって絡み付いていた。
まるで、蛇が巻き付いたようでもあった。
「男石と女石は離れたまま、距離にして七、八百メートルぐらいしか離れ

ていないのに、永遠に縁は切れたままなのよ」

“縁切り祈願話”の序章部分を、嘆息調の喋り口になって、可津子が示して見せた。

「ここは、やっぱ、気味が悪いよ」

「臆病な人ほど、こういう世界の虜になるものよ。案外と直彦などその口かもね。もっとも、直彦とわたし、縁切り話には、なんの縁もゆかりもない仲だけど、今のところはね」

「今のところはですか？」

「話は愉しまなくちゃ。どうなることだか」

何もかもが、可津子の方がリード役、可津子の口にした意味のほどは、直彦にはよくは分かっていなかった。いつもこの調子だった。

二人は、菅塩神社から元来た道にと戻った。今度は、下から風が舞い上がって来た。寒かった。その分、二人の体は冷えた。

数刻後、二人は車にと戻って来た。

助手席に座ると、背を屈めながら可津子が言った。直彦にも暗示を懸けるべく、それとなく、言葉の遊びも交えての言辞を弄した。

「外はやっぱり寒いわね。車の中だと人心地つけそう。指先だって凍えちゃったわ」

可津子が冷えた手を直彦の掌に被せて来た。

肩を寄せるようにして来たので、微かに、髪の香料が匂った。直彦は身

を固くした。いつか、母親を亡くした際、可津子に抱擁をされた時も、直彦は香水の匂いを嗅いだ。

「わたし、男絶ちしますからと、いまもお願いしたばかり。願を懸けるなら、わたしだって、それぐらいのことはしなくちゃね」

直彦の気持ちを読んだ上で、可津子は直彦を軽く躱（かわ）した。

媚態だけは示した。

それでも、可津子は直彦の気を引くような台詞だけは口にしては見せた。

「半端はしないの、わたし。一連の潔斎が終ったら、直彦を一人前の男にするために、あれこれと導いて上げるわ。いつまでも、わたしが直彦の母親代わりってのも、無邪気過ぎる話じゃない。まあ、何もかも、一から教えるから、ちゃんと、わたしに付いて来なさい。ねえ、わたしね。その気になったときは、何度、イクか分からない女（ひと）、その素晴らしさを直彦には授ける心算（つもり）よ。今はこの意味、直彦には分からないとは思うけれど、イク時、わたしね。白目を剥くのよね。そうね。その内、この凄さ、ご披露目して上げるわ」

この、口説き文句だけは凄かった。

“白目を剥く”そんな“女の性の症態”云々の内容話が直彦に分かるわけもなかったが、可津子はちょっと得意ぶって見せた。

同行させられたことの意味だが、可津子からは、縁切り観音に願を懸ける呪いの相手の名が明かされた。

話の片棒を担ぐよう約束もさせられた。
その役目を果たせば、成就した時には、「わたしの体で思う存分愉しませて上げるわよ」とも繰り返し口にし、なおも、可津子は直彦を唆（そそ）かして見せた。

2

可津子の指示通りに直彦は動いた。
呪いの対象とされたのは香山和光の妻、美也子だった。
美也子は可津子の大学時代の友人の一人であった。香山和光とは学生時代の一時期から、気まぐれな関係ではあったが、可津子は“ある種の性愛関係”を持ち、いまもその気まぐれな関係は、女主導の可津子の気まぐれのままに、続いているという。可津子が直彦に口にした“ある種の性愛”とは…もちろん、直彦はその仔細については知る由（よし）もない。
何にしても、ここまでは、可津子のペースでしか事は運んではいなかった。美也子については大学卒業後は可津子は会っていず、大方のところ、相手は可津子のことを忘れてしまっているはずだともいう。
もっとも、美也子の方は、美貌を売りに男漁りはしているらしく、浮気相手がいると可津子が口にしたので、間接的には、美也子の動向を可津子は把握しているようだった。

菅塩神社に二人が足を伸ばした三日後、直彦は可津子を車に乗せて、美也子の浮気現場とやらに向かうことになった。

世田谷区の一劃となる成城大学正門通りの銀杏並木に車は乗り入れた。もう、半ば以上、銀杏の黄葉が吹き千切れ、道を埋めていた。

風に弄ばれて黄葉が舞っていた。

しばし、車を停めたまま、可津子と直彦は待ちの姿勢で時を過ごした。やがてのこと、銀鼡色の車がやって来て、道路際に止まった。最新式のボルボなので目立った。運転席に男だけが乗っていた。一台のタクシーがボルボの近くに来て停まった。そのタクシーの中から、派手目な感じの印象の化粧をした女が降り立った。美也子だった。

「女としては上等の方でしょ。男たちがほおうっておかないタイプ？あいつもその気ぃ」

意味が分からなかったが、直彦には女の嫉妬心の一つのようにも聞えた。

ボルボが発進した。あとを就（つ）けた。

その行く先を可津子は知っていて、行く先を口にした。第二、第四の木曜日の午後一時に、美也子と男は会う。その話ぶりによると、成城大学裏のマンションに住む地の利があって、時折りに、美也子が男に会うのを可津子が目撃したのがきっかけで、男と女の情事の成り行きに、可津子は関心を持ったということらしい。執拗な可津子の性格も知れた。

「別に、美也子に恨みがあるわけじゃないのよ。ただね。男に貢がせてい

い暮らしをして、適当に遊んでいる美也子が許せないだけ。ただ、ちょぴり、同姓同士として、世の中は怖いのよってこと、わたし、美也子に教えてやろうと思っているだけなのよ」

気持ちよく走り進み、数刻後、ボルボは新宿副都心街にある高層ホテルの地下駐車場に辿り着いた。この後、可津子から指示があった。美也子に接触するよう命じられた。

(それにしても、ここまで調べ上げるとは相当な執心だ。成城地区からここまで、いつもタクシーを駆けって追尾していたのかな?)

上階に上がる道筋、直彦がちらと考えた疑問である。この時、可津子は車に残っていた。一階フロントから少し離れたエレベーターの乗降口で、女は男を待っていた。

素知らぬ気に近づき、直彦が美也子に声を掛けた。眼で軽く会釈をした。

「どこかでお会いしましたよね。あれ?人違いかな」

とぼけたふうの口振りであった。

怪訝そうに女は目を向けただけだった。

その時、男がやって来たので間合いがずれた。そのままに、お互い擦れ違っただけの関係、男と女はエレベーターに呑まれて行った。

この後、上階のカフェラウンジで、可津子と直彦は向かい合って座った。冷え冷えとした目で、可津子は直彦を見遣った。

話し掛けにくい空気が流れた。注文を取りに来たボーイに、可津子が「カ

フェ・オーレを二つ」と告げた。
「美也子って女、昔からカフェ・オーレがお好みなの」
と、言わずもがなの説明を可津子が加えた。
しばらくは、二人は沈黙したままであった。
二人の間が持たなくなった頃、カフェ・オーレが二つ、テーブルにと運ばれた。
「カフェ・オーレに意味ありですか？」
「そう、これも仕掛けの一つになるのよ」
「ふーん」
「わたし、香山の奥さんだからって、ジェラシィなど感じているんじゃなくてよ。勘違いしないでね。今度の一連の話、わたしね。自分に霊力があるかどうか、一度、確かめてみたいと前々から思っていたの。多分にね、わたしにも霊力有りなのかもよ。それで…それが縁切り“祈願話”に首を突っ込むことになった動機よ」
いつも、可津子の話は精神分裂気味にあちこちにと飛ぶことがあった。いまも、独りよがりの言葉を弄んでいるようだった。
「よく分からないよ」
「その内、分かるわよ。わたしの手足になりなさいってことぉ。話が満願成就するまではね。そうすれば、このわたしの女体の持つ素晴らしさを、あなた堪能出来るんだからぁ。ご褒美付きぃ。いつまでもよ。あなただっ

て、“異性の女”ってものを、何も知らずに過ごす男のまんまじゃ、つまんないでしょうよ」

「そんなこと言われても…」

「想像性のない人ね。今頃、このホテルの一室で、あの二人、どんなことをやっていると思う？イク時、美也子もわたしみたく、白目を剥いている口かなと、思わず、想像したりしてぇ。でも、こう言う考え方ってさ。つまんない話かもぉ。そっか、直彦をわたし好みの男に仕上げるってことが、わたしにとっての、これからの一大テーマなのよね。そっか。そっかぁ。これ、大事な話だった。まあ、こう言うことって時間が掛かりそうだけど、わたしぃ、“男絶ち”ったってぇ、直彦がわたし好みの男になるまで、それまで待てるかな」

「時間が掛かりそう、ですか？なんか、ぼくには資格がないみたいな話になって来た」

「いいの。その話は。いまだってその気だけれど、あいつらに触発されてその気になるなんて、そんな…わたし、気持ちまで下司（げす）話の相手はしたくないわ。ああそれから、次なる話の展開ありよ。東京版縁切り神社のことも、あなたに教えておかなくちゃね」

可津子は話題を振った。

男と女の本番話から、別件の本筋話へと、今度は直彦を導いた。

3

可津子の話は、東京・板橋区本町に今も存する“縁切り榎第六天神社”のことに及んだ。

彼女が前置きしたところによると、可津子自身も，宮司の有縁者の一人だという話になる。“わたしにも霊力あるかも…”と、口にしたそのことも関係が有りそうな話であった。

これからの話の件（くだ）りには、彼女自身の内輪話も含まれていた。

縁切り信仰の方はほとんど廃れているが、一部には絵馬なども残されていて、往時のことは、郷土研究家の研究の対象ともなっているという。昭和三十五年頃までは、本町には大きな社があり、板塀に囲まれた境内には、樹齢百年余と称される大榎の樹があった。

樹高は四十メートルほどもあり、幹は太いところで六メートル、当時は、牛蒡（ごぼう）締めの注連縄が、樹の根元には張り巡らされていた。一代目の大樹は、明治十七年の大火で枯れ死した経緯があり、可津子が目にしている榎は当代、二代目ということになる。

縁切り榎第六天神社の絵馬は、真ん中に榎を配し、右左に、それぞれにそっぽを向いた男と女が描かれてあるのが特徴である。

信仰の初めは、江戸時代に盛んだった富士山信仰詣出（もうで）の“富士講”に関係があるとされるが、“菅塩神社縁起”と同様に、たしかなこと

はわからない。“縁切り榎第六天神社”信仰については、次のような持って回った話があった。

一旗上げようと江戸に出て来た或る男が、努力の甲斐があって出世を果たし、大きな“油問屋”を営むまでになった。丁度、世直し騒ぎのある物騒な世の中のことで、神仏に頼る気持ちになり、富士の霊山に登ったところ、この男に“弥勒菩薩”が乗り移った。

今でいうところの一種の新興信仰を興（おこ）し、この男は教祖さまになったが、さらに、信仰度を深めるため霊山に入って三十一日の断食行の後をした。この教祖さまは、神の導きなのか、何の故（ゆえ）なのか、修行の果てに死んだ。話には前段あり。

この男が霊山に入る時、身を浄めるために、妻子と別れての出立（しゅったつ）となったのだが、涙の別れをしたのが板橋宿の“泪橋”、その傍らに立っていたのが、榎の大樹で、以来、縁切りに霊験ありの噂が広がり、“縁切り信仰”なるものが生まれたとされる。

また、この榎の樹の下を通ると“不縁”になるとされ、花嫁行列はこの地を避けた。

公武合体のすすんだ文化年間、第十二代将軍家慶に降嫁（こうか）した楽宮（さざのみや）は、わざわざと遠回りをし、十四代将軍家茂に降嫁の和宮（かずのみや）の通行の際には、樹を菰（こも）で包み、その下を通ったという。祭神の祟りを怖れたのであった。

これまでの話は、可津子が直彦に語ったことだが、もう一つ、縁切り観音榎第六天神社の縁起成り立ちの話に、可津子の母で、女神主でもあった可児（かこ）が加担していた。

実は、二代目の榎の樹が枯れたことについては、今も地元では、その因を作ったのは、可児だという話も伝わっていると云う。

何やら長々とした話なのだが、この手の話が可津子は好きらしく、いわく因縁話が続いた。ひとまずはおとなしく直彦は話を聞いた。

その昔にと話は戻るが、第二代目の榎の樹と祠堂は元の場所にはない。

そもそもは、大きな板塀に囲まれ、門の入り口には、それらしく御幣の下がった注連縄も飾られていたのだが、当時の神主が財政上困り、可津子の一家に土地ごと売り渡した。母親の名は可奈子なのだが、榎第六天神社の縁切りの由縁を利用して一儲けを企み、可児なんぞという名でこちらも新興宗教を開いた。掛け軸の絵柄に、榎の樹をあしらって，信者に売り捌（さば）いたりもした。

だが、日本の高度経済成長期にあった頃、自動車修理工場を営んでいた可津子の父親が図に乗り過ぎて倒産、その頃、期を一（いつ）にして、二代目の榎の樹は枯れ死にした。

結局、地元では大地主であったのに、一家は土地を人手に渡す羽目になった。そんなこんなで、今日（こんにち）まで来たわけだが、今現在は神社の跡地にはマンションが建ち、筋向いの角地に第六天神社は移され、地

元の町内会が管理を預かっている。

話は私事にも及び、ややこしい家族関係も披露された。板橋本町を離れる時、父親、母親の夫婦関係にも罅（ひび）が入っており、二人は離婚した。女神主の可児には信者の男の情夫がいて、それも一因だったのだが、地元では、“縁切り榎さま”のご利益もあったのではとあらぬ噂話も喧伝（けんでん）された。

この場では、余り関係ない話とも思われたが、可津子は榎第六天神社を継ぐなら自分は四代目となると、そんな話も、わざわざに、付け加えても見せた。長々と、因縁話を聞かされたあと、直彦は可津子の方策に従い、美也子の自宅に電話を入れた。

浮気現場を目撃した翌日のことで、

「美也子さんとやらに連絡があります」

と一連話の序章部を口にして見せた。

少し、直彦も緊張したが、美也子の方が身を固くしている様子が、受話器の向こうからも伝わって来た。

「ぼく、奥さんが浮気しているのを知っていますよ。一度、その件でお会いして、話をさせて頂きたいんですが、如何（いか）がでしょうか？別に金をくれとか何とか、そんなややこしい話は一切しません」

予め、この台詞は可津子から用意したものであった。それで棒読みになったが効き目は充分であった。返事に詰まった後、美也子は溜息ともつか

ぬ吐息を漏らした。答えをまさぐってから、ややあって、ことばを返した。
「なぜ、わたしの名を？」
「美也子さん、浮気は認めますね。一目会って貴女の美人のほどに感じ入りました」
「あの、昨日、会った人ですか？でも、わたしの名を知っていて、ここに電話をして来るなんて、どういうことなんですか？あなた…どういう人なの？」
「電話で語れるほど簡単な話じゃありませんよ。別に質（たち）の悪い男じゃありませんから、その点はご安心下さい。実は、美也子さんのご主人の香山和光さんと別れさせるためにね。“縁切りの呪い”を祈願している女性がいるのですよ。そのことを、美也子さんにはお教えしたくて」
「何のことですか？縁切りの呪いって…」
気丈な声で応じていたのに、美也子の口調は乱れた。その声は震えていた。
「ともかくお会いしてからことの仔細はお話ししますよ。あなたがきのうの午後、いい時間を過ごしたあのホテルの一階のコーヒーハウスで明日の午後二時にお待ちしています」
「それって…あなた、どこまでのこと知っているの？」
何か美也子は言い掛けたが、用件だけを告げ、電話を直彦は一方的に切った。

4

美也子と直彦が会う段取りが整った。

指定したコーヒーハウスには、午後二時前に、先ず、可津子が姿を現した。そっと、直彦に仕掛けの品を手渡した。

小さな薬包で、中には、粉状のものが入っていた。縁切り榎の信仰には妙な風習が今も生きていた。榎の幹の皮を粉にし、相手に飲ませると霊験あらたかで、必ず、悪縁が切れるという言い伝えがあった。

薬包の中身は正真正銘の縁切り榎の皮の粉末、それも可津子の母親可児が信者に小分けするために保管していたものを、わざわざに今回は持ち出して来たという念の入れ様、いかにも“本物”らしき代物であった。

立会人の可津子は片隅の目立たぬ場所に席を占めた。黒いフェルトのクロシェ型の帽子を目深かにかぶり、同色のテーラードジャケットに焦げ茶色のセーター、スカートもタイトな茶系統のものを選んだ。

何しろ、可津子と美也子は、直接には六年も会っていない仲なので、多分、気付かれないだろうと思われた。

午後二時きっかりに、不安そうな面持ちで、あたりを窺いながら、美也子がやって来た。その姿を見付け、直彦が迎えのために席を立つ。

にこやかな笑顔など振り撒（き）まきながらのことで、それらしく直彦

は振る舞った。
「やはり、あなたですか」
少し怒ったふうの口ぶりで美也子は応したが、不審者の容貌、身なりが脅迫者のイメージとは違っていたので一安心したふうの表情も見せた。
丸顔で、かつ、幼形成熟者体型の直彦のこと、警戒心を解いたかにも思われた。
「わたし、ほんとうは困るんです。こういうこと…」
席に座るなり、美也子は抗議して見せた。相手に舐められまいとして虚勢を張っているのやも知れなかった。
ボーイが飲み物の注文を取りに来た。
「カフェ・オーレでしょ。お飲みになるのは」
「……」
呆気に取られた顔になり、それから、いっときおいて美也子は小さく頷いた。“相手は何でも知っている”途端に、美也子は相手に警戒心を抱いたのか、頬を強（こわ）張らせた。
「何をどこまで知っているのですか、わたしのこと…」
電話で問うた時と同じ台詞を口にした。
「何をって？具体的な質問でなければ答えらせれませんよ」
「…そうね。わたし、自分の素行のことは認めるわ。でも、主人も同じよ。ねえ、わたしを呪っている女性（ひと）だけど、主人の愛人か何かなの？」

「まあ、そうかも知れません」
「そういう言い方、あなた卑怯よ」
「相手を確かめる法ならお教えしますよ」
「あなた何者？興信所か何かの仕事をしているんですか？」
「いいえ」
と、直彦が言った時、飲み物がテーブルに運ばれた。カフェ・オーレの用意がされていて、テーブルのカップに、ボーイが手慣れた手付きで、順繰りに、コーヒーとミルクを注いだ。
重苦しい気分のままに、二人は、黙ってその様を見ていた。
その時、場内に「香山さん、香山さん、お出でになられましたら、カウンターまでお越し下さい。お届け物をお預かり致しております」というアナウンスが流れた。
「わたし？こうやまって言いましたよね」
「ええ、そう聞えました」
「誰かしら？変ね」
と、訝（いぶ）かったが、咄嗟（とっさ）のこと、判断力を失い美也子は席を立った。
美也子が席を立った。その合間に、直彦はカフェ・オーレの中に薬包の中身を落とし込んだ。スプーンでよく掻き混ぜた。
間もなく、美也子が席に戻って来た。

「やーね。人違いみたい。香山じゃなくて神山（かみやま）さんて名だったわ」

瞬きもせず、直彦の顔を見詰め直してから、美也子はカフェ・オーレのカップに口を付け、夢中で啜（すす）った。無言のままに直彦は美也子のそんな仕種を眺めていた。

離れた別席から、これらの様を可津子がつぶさに観察していた。

こちらは、強い焙煎珈琲を嗜（たしな）むように、ゆっくりゆっくりと啜っていた。

5

さらに、それらしい話を持ち掛けたことから、のっぴきならなくなり、美也子は直彦の言うがままに、縁切り榎第六天神社まで足を向けることになった。新宿から板橋・本町まではタクシーで三、十分ほどであった。

車中、榎第六天神社の大まかな由来記などを、直彦は美也子に語った。

「ほら、あの場所です」

直彦が指さした一角に、榎の樹が立っていた。タクシーの窓からも望めた。石柱のある奥に、町内会の有志が設けたテント掛けの休憩所があった。美也子は直彦の指示に従い、そのテントの下を潜って、石畳の道を歩いた。その奥に祠堂（ほこらどう）があった。狭い境内は六畳一間ぐらいほどの

スペースしかなかった。

祠堂と、祠の背後に榎の樹がそれぞれに立っていた。すっかり落葉していたので、枝振りだけの素っ気ない景色であったが、まだ、樹齢が若いせいか陰惨な感じはない。

お堂の上には、雨露をしのぐためのビニール製の波板が張られていたりで、どことなく、人工的な社（やしろ）にも見えた。

それでも、祠堂の屋根は赤褐色の銅瓦だったので、年代そのものは感じ取れた。

観音扉の祠堂の台壁に榊（さかき）が二基捧げられており、祠堂の外側の板壁に注連縄（しめなわ）が申し訳程度に飾られていた。

恐々、美也子は足を運んだ。他に人の姿はなかった。風はないのに、冬の午後のこと、うすら寒さだけが、この地にはあった。

祠堂の前に立ち、美也子はガラス扉の奥に鎮座まします“ご神体様”を眺めた。

台座の上部には藍色の幕が張られていて、二本の蝋燭（ろうそく）が、ご神体らしき物の両側に立てられていた。“ご神体様”だが、こちらは、枯れた榎の樹幹の一部で、勿体（もったい）らしく、台座の中央部に祀られていた。“呪いの粉末”の正体だが、真偽のほどは知れないが、この樹片から可津子は採取したのやも知れなかった。

何の曰（いわ）くありか、祠堂に向かって右側には、樹幹の一部を嵌め

込んだ一メートル余の平べったい石塔も建てられていた。
この天神社の縁起については、すでに、美也子は承知しているのだから、ほんとうは足を踏み入れたくないはずだったが、自分を呪っている相手の名が分かるかも知れないと告げられたことで、ここまでやって来た。
「縁切り祈願って、ほんとうに効き目があるのかしら?何か、わたしには誰かの嫌がらせのような気がするわ」
「さあ、そこまではぼくにも分かりません。ある女性がぼくのところに電話をして来て、あなたのことを教えてくれたんです。それで心当たりを自分なりに探ってみたのですが、その相手のことはぼくには分かりませんでした。だから、そのぉ、願懸けの結び文を探し出せれば…唆されたのかも知れませんが、その相手は香山美也子の名を記し、その願懸け文をここの社に奉納したと告げています」
左手側に設けられている結び文や絵馬を奉納するための掲示板を直彦が指差した。まだ、縁切りの信仰は、この街中でも生きているらしく、およそ、三十枚ほどの結び文と、数枚の絵馬が、針金製の掲示場所には結び付けられていた。
「ぼくも電話を掛けて来た女の正体を知りたいですよ。多分、まだ、新しいものだと思いますが、一枚一枚、念入りに調べてみますか」
「わたし何だか怖い…人の秘密を探るような話だし、それに、一度、願を懸けた人の、結び文を解くというのは、その人の願を解いてしまう怖れも

あるわけでしょ。そんなこととしていいのかしら?」
「それで禍（わざわ）いがあれば、ぼくが引き受けますよ。言い出したのはこのぼくだし」
「いいわ。ここまでわたし来てしまったんだし。もう、引き下がれない話よね」
小さな声で美也子は応じた。
針金の横棒は四本あった。それらしき結び文の一つを直彦が手に取った。
“赤い奉納のスタンプ印”が押された備え付けの結び文を直彦が解いた。
“私を失明させないで下さい”と書かれてあった。
縁切り榎信仰には、男と女のことばかりが人の口の端（は）にのっているが、病気との悪縁、災難、悪事との縁切り祈願なども多く、また、時代の流れも反映して、受験戦争に勝つ抜くために、神祈願する向きもあった。
「だめよ。それは早く戻して。その人が失明することだってあるわ。願い文なんだから」
「罰を受けるのは、このぼくです。代わりに、このぼくが目が見えなくなるかも知れない」
と、言いながら、その結び文を直彦は元に戻した。それほど、真（ま）に受けているふうでもなく、次の結び文に目を付けた。
「ああ、これだな。きっと。新しふうだし、これだけ、回りのものとは様子が違う。これがいちばん怪しい」

直彦が指差した結び文は、神社備え付けのものではなく、ルーズリーフの切れ端を破って、結び文にした代物（しろもの）だった。

これの仕掛けについては、直彦は承知していた。筋書痛りに、事は運ばれていた。結び文を解くと、筆跡が分からぬように定規を当てて書いた四角い文字が読み取れた。

“香山美也子と夫との仲を裂いて下さい。お願いします　さえ子”と印されていた。

結び文が美也子に手渡された。美也子の手がぶるぶると震えた。横目で、直彦は美也子の顔色を窺っていた。顔は青ざめ、半ば開いた唇がわなわなと震えた。何か、言いたそうに動いたが、言葉にはならなかった。

いっとき間をおき、美也子は虚空を見詰めたが、いきなりに、その呪いの結び文をびりびりと裂き、破り捨てた。風に弄ばれた紙片があたりに飛び散り、舞った。

臆面もなく直彦が美也子に問うた。

「さえ子って女性（ひと）、美也子さんは心当たりはあるんですか?」

「ないわ。こんなひと、夫に愛人がいたとしても、あのひと、尻尾は出さないタイプ、ヘマはしないはずよ」

こう言い放ってから、何か決意したのか、直彦を、この場から外にと美也子は連れ出した。境内を出た時、道ながらに、美也子があれこれと話し出した。独り言とも取れる口振りだったが、自分を取り戻すためにか、美

也子は自分なりの思いを直彦に告げた。
「わたし、このさえ子って女、どうしても捕まえてやるわ。それにはあなたを味方に付けるのも大事よね。ね。わたしの何が欲しい？このわたしに、あなた何を求めているの？」
「別に何も…。強いて言えばぼくに電話をして来た、この迷惑な女の面を一度見てみたい。その点では、美也子さんと思いは同じかも」
「そうなら、わたしもあなたに相応のものを提供するわよ。ね、お金？それとも、わたしのこの肉体が欲しい？」
「魅力的な女性だから、肉体を提供すると言われたら、悪い気はしませんが、どちらにもぼくは興味はありません」
「よく分からないわ。何のためにこんなことやってるの？」
「事の成り行きってことです。こう言うことに巻き込まれてしまった。その結末は自分でつけないと、と、少しはまともなことも考えてはいるんです」
「それならわたしに協力してぇ。ちゃんと聞いておきたいことがあるわ。あなた何者？その女の素性を知る前に、あなたの素性のほども知れないと、味方には付けられないでしょ」
道路際を、乱暴に車が通り過ぎて行った。
そのはずみに、美也子の髪が下から煽られて乱れた。
きっとなった強い目付きで、美也子は直彦の目を見返した。

「或る医学校の学生ですが、一年余、休学中、あちらこちらでバイトやったことがあるから、その時に、ぼくの名前とかを知った人物がいるのかも知れません。心当たりと言えば、その程度、自分のことをあれこれ喋るの、あんまし、好きじゃないし」

適当に、嘘話を直彦は美也子に返した。

「いいわよ。ともかく、女の素性探り、話の進展があったら連絡を下さいな。協力出来ることなら何でもするわ」

「その内、何とか言ってくるでしょ。ぼくが美也子さんに、連絡したかしないかぐらいは相手だって知りたいと思いますよ。そうでなくちゃ、ただの悪戯電話、ぼくはからかわれっているってことになりますよね」

そう直彦は言って退け（のけ）たが、筋書だと、可津子が描いたシナリオ通りに事は運ぶはずだった。その一翼を担い、今は可津子に操られて、直彦は一層の有能ぶりを発揮しているところだった。

その分、美也子は、可津子のいう“怖いゲーム”の綾糸に、確実に、絡め取られてつつあったことになるのであった。

6

銀座にも近い新橋寄りの場所にある古風シティホテルの一室が、何か月に一度ぐらいの割合で、香山和光と久坂可津子が出会うご指定の部屋であ

った。部屋には古い調度品が揃っており、いっとき、二人は趣味のいい人種に生まれ変わる。葡萄の実と葉をイメージしたランプシェード、備え付けの椅子やテーブルなどもロココ風の造りで、壁画にはヨーロッパの古城の絵なども掛けられていた。

ほんとうに香山のことが好きなのかどうか、可津子は突き詰めて考えたことはない。だが、香山と“性愛の時”を持つ前の晩は、いつも、不眠症になる。あれこれと妄想が逞（たくま）しく、ついつい、指が下半身に忍んでしまう故（ゆえ）のことだった。

つまりは、ちょっとした錯乱状態にも陥るというわけだった。“淫らな女”を売りにして来た可津子としては、それなりの心の準備をしておく要ありのこれは所作なのであった。

この日は、可津子なりに、別の舞台の設定役を引き受けた。美也子の誕生日祝いに香山が買って帰るはずだったケーキを、指定の青山の洋菓子店で、可津子が求めた。

ガトー・ルノアという名が付いており、アーモンドのメレンゲをチョコレートクリームで挟み、ナッツをまぶしたものであった。

二人が性の時間を持つベッドの傍らのテーブルの上には、白い上質の包装紙に包まれたそのケーキの入った箱が置かれていた。

ベッドに入った時、ちらと、可津子はケーキ箱に目をくれた。

ケーキの包みは一度開けられた。

この時、可津子は自分なりのおまじないの続きをした。“縁切り榎の幹の粉末”をケーキの上に、ぱらぱらと落としておいた。

（この“呪いの劇”の主役に、美也子を抜擢して上げたんだから、ことあるごとに登場してもらわなくちゃね。まあ、そういうことぉ。効き目はあると思うよ）

そんなふうの独り言も漏らした。

「さあ、ここからはわたしが主役よ。自作自演劇の始まり、こんなこと、させてくれる女ってのは、絶対にいないわよね」

「はは、それを言われると弱いよ」

「それだけじゃないわ。美也子と結婚したいって思ったのは、男の欲望を充たしたいがためのことでしょ。馬鹿みたい。ほんとうに男って、単純で詰まんない動物よね」

「それにしても、すでにして、乳首が勃（た）っているってのは凄いよな」

「そんな程度じゃないでしょ。全身反応よ。ほら、こちらの方もちゃんと観察なさいよ」

「いつもの通りにか。どれどれ」

可津子の下半身へと、香山は視線を向けた。

その様を、可津子は一渡り見遣ってから、下唇を舐めた。

首を少し上方に上げた。

「処女の如（ごと）くか。参るな。そうやっていつも、可津子は露出症女

を演じる」

「如しじゃないわ。男のものなんてここには一切入れさせないんだからぁ。自分の指だけの遊び、そういうことってぇ、つまりは、ここは聖域そのものよ。ここに男の目が二つ張り付くだけで、それでわたしはいいの。これからの変態の様々、ようくご覧あれかしよね。さあ、男の出番はなし。あなたはあなたでお好きなように」

この場の状況は裸の男女が向かい合っているだけ、ベッドの上に仰向けに寝た可津子が、股間を大きく開いて露出狂女そのものとなった。流れのままに、男女ともに、それなりの自慰行為に耽るのが、二人の所作だった。

あくまでもその傍らに香山は立ち一部始終を見ているだけの立場を選ばせられていた。

「男は、男石で、女は女石、この前、わたし、菅塩神社にお詣りして来たばかり。お互い、もう、結ばれることはない。その続きの話、まるで、わたしたち、この話を地で行くような…」

一言、可津子が付け加えて見せた。

まさしく、そんな舞台設定が、ここには用意されているかのようだった。

つまりは、お互いの“自作自演劇”が、ここでは成立していたことになる―。

妄想の世界にお互いが堕（お）ちたことにはなるが、可津子の乱れようが半端ではないので、その様を目で舐めながら、香山もいい思いをしてい

たのは事実であった。
こんなことが、もう四年余は続く。
長々と、小一時間ほどもの間、可津子は体全体をくねらせた。もちろん、下半身が中心の手淫の技ではあったが、それこそが、全身全霊の打ち込み様、無我夢中の域とやらを、可津子は彷徨（さまよ）って見せた。
得も言われぬ可津子の喘ぎの声も男を存分に愉しませたが、何よりも、“肉飾り部”の様態の変わり行く様に、香山などはいつも驚嘆させられている一人だった。
その淫らな様を可津子なりの言葉に代えれば、次のような表現となるのだった。男には分からぬ女の一面が、ここには如実に語られているようで、香山も感じ入ってはいた。
『挿入行為にだけ夢中になって、ただ、腰を動かしているだけの男たちには、女の本質なんて分かりはしないんだからぁ。よ～く観察することぉ。そう、分かり易く言えば、“女性器の勃起”ってことかしらぁ。それも、全身のね。分かるかなぁ』と、いう話にはなるのだが…。
いま、可津子は、さらに、乱れに乱れていた。ひくひくと半白の瞼が痙攣した。それに連れて下半身も震えを帯び、小動（こゆる）ぎしていた。閉じては開く股間の奥所の肉飾り部が、もう、二重三重の様々な皺を刻んでいて、おぞましい様態をそこに示していた。
外に外にと食（は）み出した大小の陰唇が、可津子の昂（たか）まりの

度に、おのれのものを食い合うように、蠢（うごめ）いた。
やがて、昂奮の極みにと、可津子は導かれて行った。巧みな指の動きと共に、下半身が痙攣し始めた。もう、白目を剥いていた。
「うぅー」と可津子が呻いた。
どこを見詰めているのか、可津子の白目が泳ぐ。ひくくんっと、一度、二度と、下半身が撥（は）ねた。ほんとうの白目の状態だった。
ややあって、可津子が香山に言った。
「ここの様をちゃんと教えてっ。どうなってるの？どうなっちゃっているの？」
「ああ、何ともすざまじい。いつまでも女自身の射精液のようなものが、可津子の肉穴からは流れて出して来て…」
そこまで、香山が告げた時、あらゆる肉体の緊張が解けたのか、もう、一度、香山の言葉に嬲（なぶ）られたのか、可津子の下半身が反応を示し、ぴくく、ぴっくんと撥ねた。
肉体が弛緩した末のことか、白目がふわーと、開いたようも見えた。
これが、可津子の絶頂感の様態らしく、しばらくの間、可津子はその余韻に酔いし呆（し）れていた。あらぬ空間を、可津子の、その呆（ほう）けた白目は探っているかのようでもあった。
これが、可津子の本旨とするところの“特異の性愛世界”の、一部始終なのであったー。

7

午前零時を過ぎると、さすがに、冷え込みも厳しくなった。

美也子と直彦は榎第六天神社を目指した。真夜中、二人は板橋・本町に着き、境内とは少し離れた場所に車を停め、相手が現れるのを待った。

「ぼくが美也子さんとご主人を別れさせるために手を貸したのは事実です。理由は訊かないで下さい。美也子さんを狙っている相手は、願懸けの結びの文が、あの縁切り天神に奉納されていることをぼくに告げました。もっとも、その結び文、美也子さんが、この前、びりびりに破り捨てたので、呪いの効き目は失せたのかとは思いますがね。それで、今夜は、呪いの“お百度詣（もう）出”、もう、三日目、満願成就のためには、お百度を踏むとその女は言いました。あの女の正体を見極める絶好のチャンス到来です」

女がお百度を踏むーこの話は、すでに先日、美也子は電話で告げられていた。こんな真夜中に、直彦の言うままに美也子が榎第六天神社にやって来たのは、多分に、彼女自身がノイローゼ気味となっているせいもあった。

すでに、美也子の脳裏には鬼面をかぶった女の髪を乱した姿が映じていた。午前二時に近い時刻になろうとしていた。

二人はそれぞれの役割分担に合わせて行動を取った。直彦は車に残り、あたりの様子を窺う役目、美也子は単身で境内にと向かうことになった。

お百度詣りは神社や寺の境内の一定地点を裸足（はだし）で百度詣り、祈願するのが習いである。願い事と相手の名を誦（しょう）すると一層に効き目があるとされている。しかし、お百度詣りを誰かに見られると、その効力はない。闇の中の蠱事（まじわざ）だから、一人で執り行うのがその法であった。

その呪いの願懸けを解かせるためにも、相手の蠱事を封殺する対抗手段として、目撃する法というのは有効となるはずだった。

予め、この点は、直彦が美也子には説明していたので、願懸けが解けるならと、美也子は納得した上で、この行動を起こした。

暗い境内を横目に、美也子は社殿に向かって左手にある柵の外の細道を伝い、社殿裏の闇に身を忍ばせた。

マフラーを顔に巻き、寒さから逃れようとした。震えは寒さのせいだけではなかったが、美也子の震えは止まらなかった。

わずかに、街頭の明かりが境内には届いていたが、美也子が目にしている闇は、どこかに、禍々（まがまが）しさを忍ばせていた。

気丈さを持つように自分に言い聞かす。何よりも、呪いを懸けている相手が誰なのかを、この場では確かめるべきなのだった。

すでに、この時、社のすぐ後ろにある榎の樹に枝に、一本のロープが吊るされていた。ぶらぶらと、風に吹かれて揺れていたが、美也子の視野には入っていなかった。

人の気配を、闇の向こうに感じ取った。歯の根が合わず、かちかちと、美也子は歯音を立てた。闇の向こうに目を据えた。

数珠（じゅず）を手にした裸足・白装束の女がひたひたと石畳を踏み歩いて来た。擦り足で一歩、一歩を歩むその様には、まさしく、鬼気迫るものがあった。

「香山美也子と香山和光との悪しき縁が切れますように…」

と、一心に、女が念唱を繰り返した。

女は左手に百本分の“こよりの束”を持っていた。元来た石畳みの道を戻り、五、六メートル先の入り口で、こよりを一本抜き、祠堂に供えた。

呪いの文句を口ずむ。

次に、踵（きびす）を返すと、また、美也子の潜む闇の方角にとやって来た。人の姿や、挙措（きょそ）は確かめられるが、顔まではまだ識別出来なかった。半分、美也子は腰が抜けていたが、勇を鼓（こ）した。いま、立ち向かわないと、機会を失うと思った。

女が背を向けた時、よろけながらも、美也子は柵を越え、女の背を追った。今度は、素早く横手に移動し、本殿裏の闇にと隠れた。

女が秘儀の法に倣（なら）い、こよりを出して捧げつつ、呪詛（じゅそ）の文句を口にする機会を待った。

「香山美也子を…」

と、女が口にした時、その横手の闇から美也子が身を乗り出した。闇の

中ではあったが、女同士の目が合った。呪いの相手を美也子は識別した。一メートルほどの間隔のこと、素手でも相手に掴み掛かれる距離だった。

「…なぜ、わたしを」

そのような文句を何回か美也子は口にしたのだが、ぱくぱくと、口が動いただけのことだった。半ば、文句を呑んだ。

「あなたは呪い殺されるのよ。榎の樹の皮、呪いの粉末を、すでにあなたは口にしているわよね。ほら、神山って名前違いで呼び出された時、あなたが好きなカフェ・オーレの中に紛れ込ませたのよ。ここに美也子を連れて来たのもあの男、これって、わたしたちのお愉しみゲーム、呪いの劇も、どうやら終末を迎えたみたいね」

そう、可津子は言い募（つの）った。

うっすらと、口元に笑いを浮かべていた。

「…そんな」そのような文句を口にした後、ほんとうに美也子は腰砕けとなり、その場に倒れ込んだ。もはや、立てない状態だった。

この時、待ち番のはずの直彦もこの場に姿を現した。可津子の指示のままに、腰が抜けた状態の美也子をなんなく背負うと、榎の樹のある場所にと運んだ。

もう、美也子は為す術を持たなかった。

榎の樹の枝から下がったロープを可津子が手繰（たぐ）り寄せた。そのままに美也子の首にロープを掛けた。次に、直彦に命じた。

「あなたは力一杯、ロープを引いて。この女の体はわたしが支えておくから」

一瞬、直彦は戸惑ったふうだったが、可津子が直彦に因果を含めた。

「ううっ…」

と、上体を持ち上げられた美也子が呻いた。地上数センチのところに美也子の足先があった。それでも、ロープは首輪にしっかりと掛かっていた。

足掻（あが）いても、美也子はロープを外すのは無理な仕掛けとなっていた。ぶらりん、ぶらりんと、美也子の体が揺れた。

もう、体重が首輪に食い込んでいた。

「あなたも殺人に手を貸した一人となるけれど、お互い、黙っていればいいってことぉ。この意味は分かるわよね。この場では目撃者なし。不分明な話よね」

そう嘯（うそぶ）きながら、今度は、可津子が、さらに、ロープを引く役を引き受けた。

「よ〜く見てみなさい。直彦、この女、白目を剥いて、半分舌まで出しているわよ。女の絶頂感を真似たつもりかしら?ふふ、わたしの真似なら、それって似非（えせ）よね。こんなもんじゃなくてよ。わたしの場合は…。これで呪いの劇はひとまず完結、さあ、わたしたち、次なる舞台にと移りましょ」

数刻後、首吊り死体は呪いの樹から外され、二人の手によって、車を停

めた場所まで運び出された。この後の展開が待ち構えていた。
ビニールの覆いシートに死体は包まれ、車のトランクに詰め込まれた。
「行く先は、話を元に戻して、“菅塩神社”になるのよ。そう、最後まで男石、女石の物語りありってことね。男石と女石、七、八百メートルしか離れてはいない距離だけれど、もはや、呪われた男と女は永遠に一つ身になることはないのよ。そう、死んだ後々までもぉ。菅塩神社の裏手が余り人の踏み込まぬ森になっているから、死体を遺棄するには好都合、あとひと踏ん張り、さあ、行ましょう」
可津子が直彦を促し車は発進した。まだ、真夜中だから、人の姿はなく、行き交う車もまばらだった。都会の闇を、ひたすらに抜け、二人を乗せた車は一路、茨城地域の目的地にと向かった。
初めは無口だった可津子だが、次第に、いつものペースを取り戻した。饒舌な女になった。気持ちが昂ぶっているようだった。
「お待ちかねの加賀直彦が“男石”、わたしが“女石”の役目を担う次の幕が上がったわね」
「ほくが男石で、可津子さんが女石ですが？」
直彦が問い返した。
「そうよ。おんなじ女石でも、わたしの場合は役どころが違うけれどぉ。いよいよ、直彦がほんとうの意味での“男石”になる役目を引き受けるんだから、わたしもその気にならなくちゃね」

「それで、ぼくは何を…」

「男本番、わたしの性のお相手役として努めてもらうわ。そうね。分かり易く言えば、わたし、イク時、白目を剥くタイプだから、存分に、直彦も愉しむことね。何しろ、生きている人間様、お佗物（だぶつ）になった美也子みたく、みっともない白目の剥き方じゃなくてよ。大いに期待してぇ」

もちろん、可津子が口にしている事の内容については、その意味はほとんど直彦には伝わってはいない。“男本番”と言われたので、男女の関係が、これから始まるのだと、　おっつけ、そのように考えた。

もっぱら、可津子は“性の話”にばかり執着した。もう、身も心も、“熱い時間のこと”にと向いているようで、トランクに死体があるという状況など、気にはしていなかった。

明け方近く、まだ、山の彼方には薄い闇が残っていた。それでも、遠くの遠くから、朝の光芒が届けられようとしていた。

がっくん、がっくんと、難路に躓きながらも、車は坂地を登った。

やや、菅塩神社を迂回するコースを辿（たど）ったが、ちゃんと、裏手の森にと踏み入っていた。二人は死体の処理をした。

遺体発見には至らないはずの、小さな岩穴の奥にと死体を投げ込んだ。

「さあ、暖かく直彦を包んで上げる至福の時間が、遂に、訪れたようよ。ひとまずは、わたしが仕組んだ縁切り物語りは、満願成就となりにけりよ。これにて完結ってことになったわよね。ねえ、次なるは、生きている“人

間さまの物語り”の始まり始まりぃよね。男石、女石の物語りは、縁切り話じゃなくて、愛と愛で結ばれるハッピーな筋書も有りよ。いい役の男石役を貰ったのは加賀道彦くん、そのお役目を忘れずに、わたしのお相手として、大（おお）いに、励んでちょうだいな。いいことぉ」

可津子が「車を返せ」と命じた行く先は、いつか、美也子が浮気相手と情事のひとときを過ごしたあの新宿副都心街にある高層ホテルだった。

助手席の可津子が、しなだれかかるようにして身を寄せて来た。

いつかの香水の匂いが微かに匂い立つ。

（今から…このぼくは憧れの可津子さんと、身と心も一つになるんだ。と、言うことは…）

車のアクセルを踏みながら、改めて、直彦はそんなことを考えた。

だが、大方（おおかた）、直彦の脳裏を過ったのは、“男石の役目”とは何だろうという思いだった。何回か、また、可津子が白目を剥く云々（うんぬん）の件（くだ）りを話の中で付け加えて見せた。

更々に、可津子は積極的になり、運転席にまで手を伸ばすと、直彦のズボンのチャックを外し、そのままに指先を忍ばせて来た。

第二幕の始まり、もう、久坂可津子ばかりは、“女石”の役目を、待ち切れずに、果たそうとしているかのようでもあった。

（完）